

高等学校における競技力向上に対する意識調査

徳島県 徳島県立ひのみね支援学校

柴 崎 絵 里

1. はじめに（課題設定の理由）

徳島県では、『徳島県スポーツ振興基本計画』に基づき、「生涯スポーツの振興」、「競技スポーツの振興」、「学校における体育・スポーツの充実」の3つの視点から、豊かなスポーツライフを築くための施策が進められている。それらの基盤づくりの一翼を担うことは、高等学校において部活動指導に携わる我々教員の責務である。特に競技スポーツの振興については、高等学校の運動部活動が果たす役割は大きく、期待の高さも感じられる。しかしながら運動部活動の現状について目を向けると、決して困難が無い訳ではない。少子化などの影響で、平成21年から22年の1年間を見ても中学校においては3部、高等学校においては4部が減少している他、全国レベルの競技者が高校入学前に県外校へ流出するなど、競技力向上を図る上での不安材料はいくつかある。そこで、本県では平成18年から現在に至るまで、競技力向上スポーツ指定校事業など行政からのバックアップも受けながら、県を挙げて高校生の競技力向上に取り組んでいる。

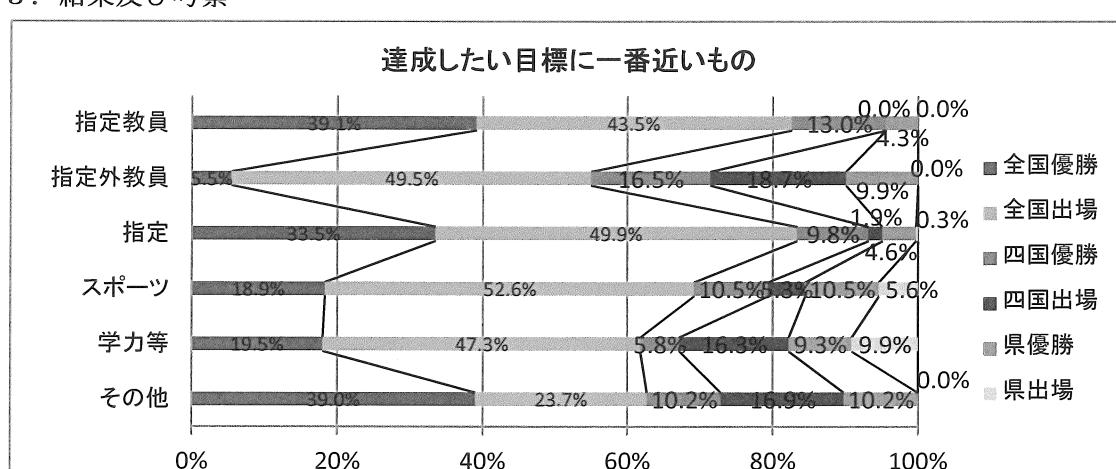
しかし、現場の指導者という立場から競技力向上を考えた場合、バックアップがある状況でも期待される結果を得ることは決して簡単なことではない。昨年度の予備調査で県内の運動部活動顧問（教員）に「現在指導している部活動の競技力向上のために必要なものは何か」とアンケート調査したところ、92%もの教員が「選手の意識改革が必要である」と答えた。このような教員と生徒の意識のズレから、満足するような結果が得られない可能性もある。

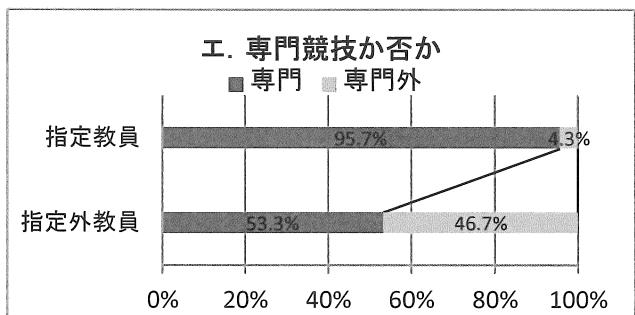
確かに、選手のパフォーマンスを最大限に発揮できるようにするために、選手個人の努力の他、指導者、家庭、学校、地域、行政が一体となった環境づくりが必要である。しかし、競技力向上を考える上で主体となるのはあくまで選手であることを忘れてはならない。本研究では、運動部活動顧問と高校生選手の競技力向上に対する意識の差について明らかにし、日頃の指導や関係者との連携に役立てるためにこのような課題を設定した。

2. 方法

- (1) 対象者 平成23年度徳島県高等学校総合体育大会における
各種目ベスト4に相当する運動部員 2・3年生 1264名
(男性781名、女性483名)
- 平成23年度徳島県高等学校総合体育大会における
各種目ベスト4に相当する運動部活動顧問 115名
(男性85名、女性30名)
- (2) 期間 平成23年6月上旬～6月中旬
- (3) 内容 アンケートによる調査（マークシート・記述）※補足資料参照

3. 結果及び考察

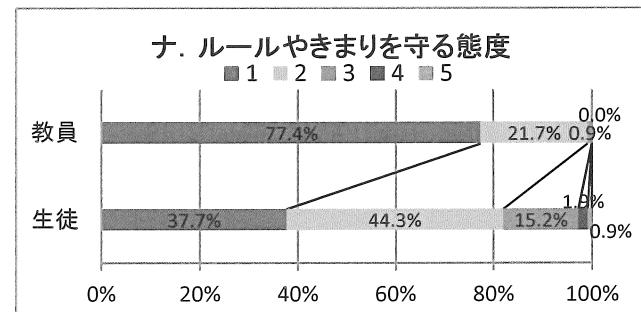
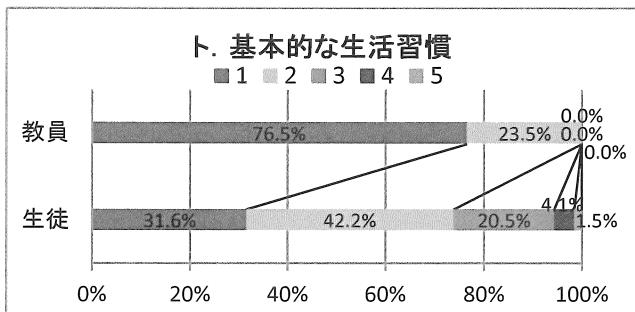
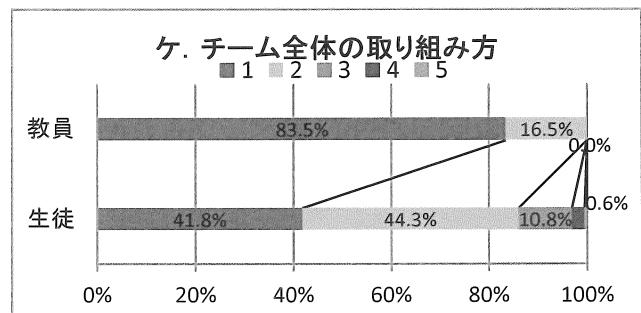
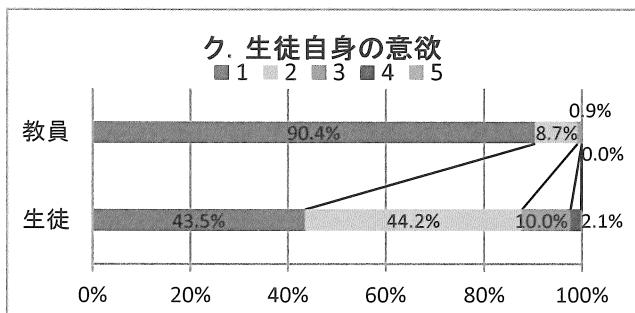




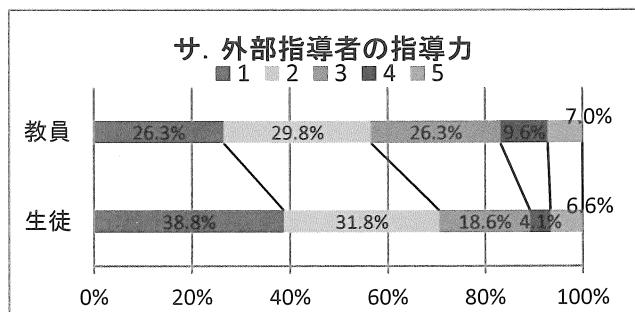
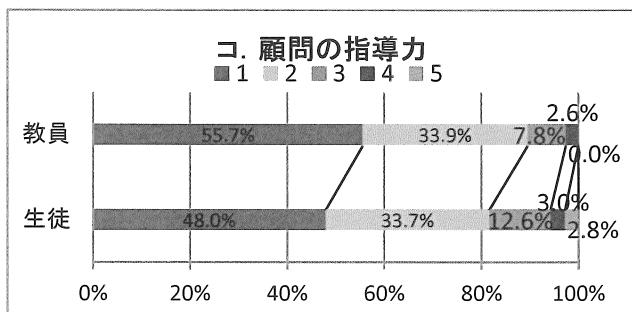
「達成したい目標に一番近いものはどれか」に対して、生徒・教員共に最も多かったのが「全国大会出場」であった。ほぼ半数以上の者が全国大会出場以上を一つの活動目標としている。また、指定競技外の教員は生徒に比べてやや目標設定が低い。「エ. 現在指導している部活動は専門競技か否か」において、指定競技外教員の半数近くが専門外であることを考えると、目標設定について見通しの立てにくさがあり、生徒との目標設定の差につながっていることも考えられる。

競技力向上のために次のことはどれくらい関係していますか

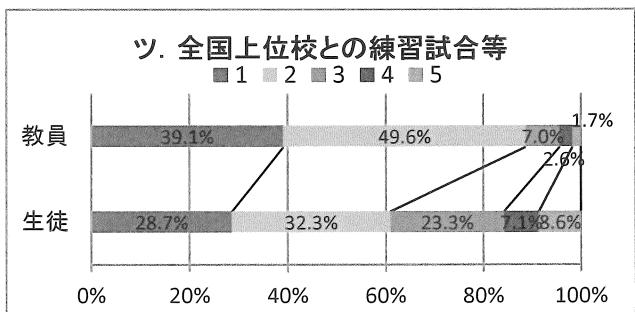
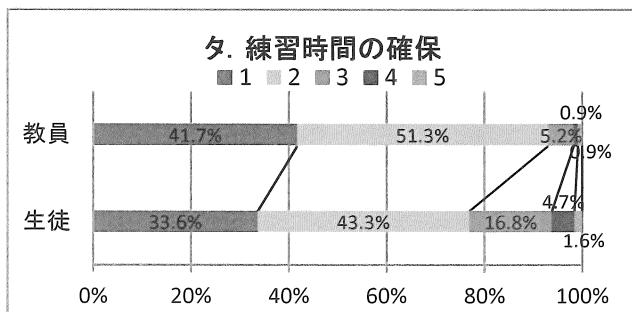
- 1 非常にそう思う 2 そう思う 3 どちらともいえない
 4 あまりそうは思わない 5 全くそうは思わない



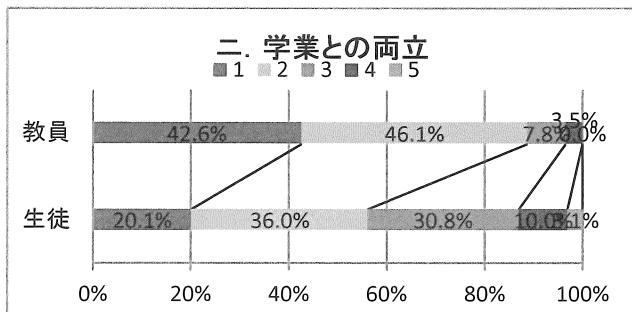
教員・生徒共に「1. 非常にそう思う」「2. そう思う」の割合が特に高かったのは、「ク. 生徒自身の意欲」「ケ. チーム全体の取り組み方」「コ. 顧問の指導力」「タ. 練習時間の確保」「テ. コミュニケーション」「ト. 基本的な生活習慣」「ナ. ルールやきまりを守る態度」であった。質問項目「ク・ケ・ト・ナ」については、「1. 非常にそう思う」の割合を見ると生徒よりも教員の方の割合が明らかに高い。競技力向上のためにこれらの大切さを強く感じている教員に対して生徒は漠然と捉えている傾向がある。



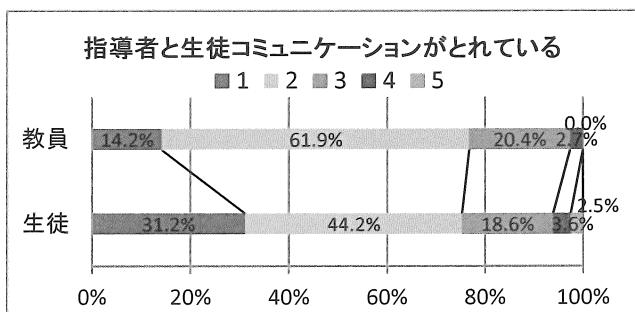
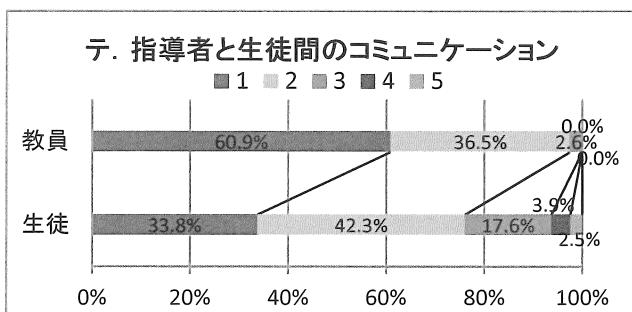
「コ. 顧問の指導力」については、教員と同様に生徒の「1. 非常にそう思う」の割合が高い。「サ. 外部指導者の指導力」については、「1. 非常にそう思う・2. そう思う」共に教員よりも生徒の割合が高い。生徒は、教員の指導力と同じくらい外部指導者の指導力も頼りにしていることが分かる。



「タ. 練習時間の確保」と「ツ. 全国上位校との練習試合等」は日頃の練習に関する質問項目であるが、ここでも前述の「ク・ケ・ト・ナ」と同じように生徒は教員よりもやや消極的であるように感じられる。

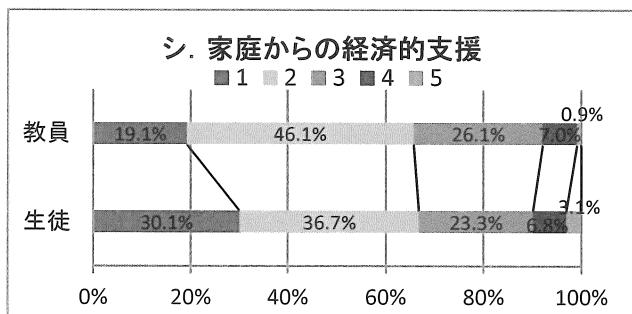


「ニ. 学業との両立」についても、生徒は「1. 非常にそう思う・2. そう思う」を合わせて6割に満たない。



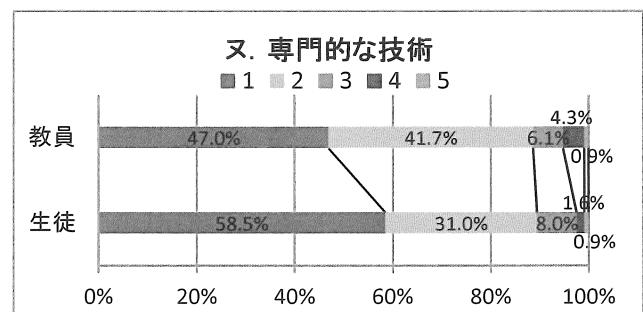
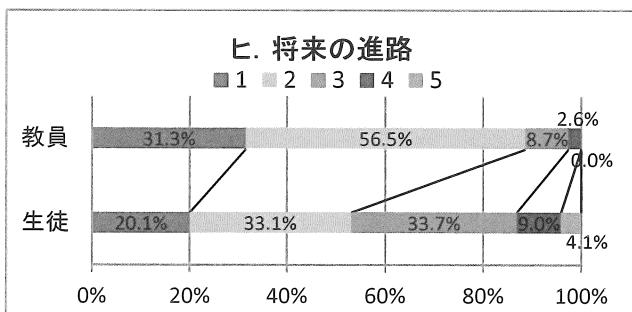
「テ. 指導者と生徒間のコミュニケーション」については、質問項目「指導者と生徒間のコミュニケーションがとれている」と比較した場合、ほとんどの教員が競技力向上のために生徒とのコミュニケーションが大切だと考えているものの、実際にコミュニケーションがとれているかというと2割の顧問がどちらともいえないと回答している。それに対して生徒は両項目とも「1. 非常にそう思う・2. そう思う」あわせて8割程度で回答している。教員はもっと生徒とコミュニケーションを取りたいと感じているようである。ただ

し、何を持ってコミュニケーションをとれているとするのか、個人の考え方には違いがあるとも考えられる。



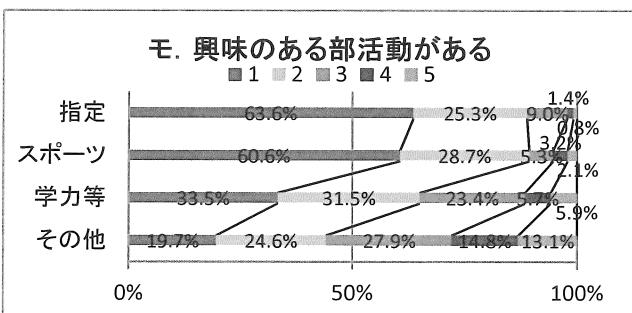
「シ. 家庭からの経済的支援」については、かなり高い割合で「1. 非常にそう思う」を回答すると予想していたが、実際にはおよそ3割未満、「1. 非常にそう思う・2. そう思う」あわせても6～7割程度であった。しかし、記述回答によると、教員の年間の支出は数万円から数十万円であることが多く、部活動関係の交際費や生徒分の立て替え、交通費等の自己負担は慣例のようになってしまっている側面もある。顧問への質問項目【金銭的な悩み】からも、家庭の状況により部費等を保護者から集めにくいとする回答が多く見られ、回答全体から見てもほとんどの顧問が何らかの金銭的なストレスを抱えていることが分かった。生徒側も道具代等が高額で家庭への負担を感じているケースが見られた。記述回答の状況から見て、競技力向上と家庭からの経済的支援の関係は無視できない。

顧問の先生やコーチから指導してもらいたいのはどのようなことですか
生徒へ指導したいのはどのようなことですか

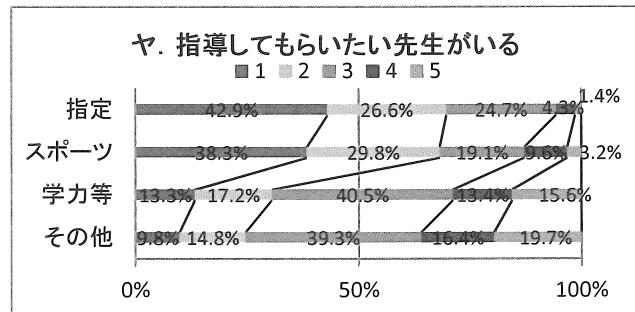
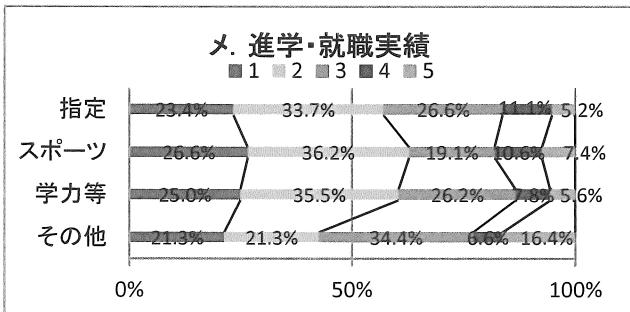


ほぼ全ての項目で「ヒ. 将來の進路」のように、教員は生徒へ様々なことを指導したいと感じているのに対し、生徒は顧問の教員から指導してもらうことをそこまで強くは意識していないようである。唯一「1. 非常にそう思う」が顧問より多かったのは「ヌ. 専門的な技術」であった。

高校への入学を決めた理由について次のことはどれくらい関係していますか

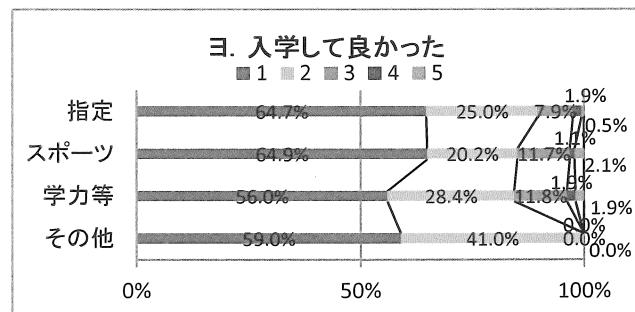
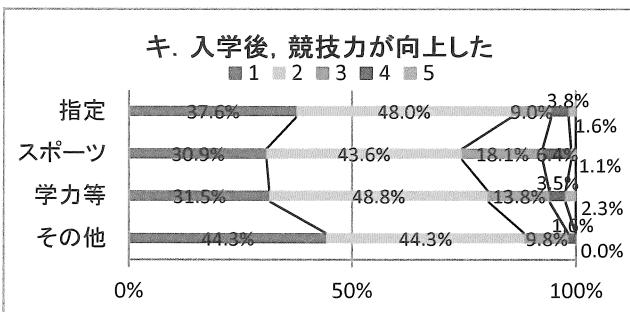


入学の区別別に「モ. 興味のある部活動がある」について見ると、学力等の入試を受験した生徒の6割が部活動への期待を持っていたことが分かる。また、残りの4割の生徒は入学の主な理由ではなかったものの、競技を続けたり、あるいは入学後に新しい競技を始めるなどして、活躍していることになる。一部の生徒だけでなく、多くの生徒に目を向けて裾野を広げていくような運動部活動の普及が大切であることが分かる。



「メ. 進学・就職実績」については「モ. 興味のある部活動がある」と比較すると「1. 非常にそう思う・2. そう思う」の割合がやや低い。入学時点での生徒は卒業後の進路よりも高校生活そのものに関心が高いことがうかがえる。「ヤ. 指導してもらいたい先生がいる」については、スポーツによる入試を受験した生徒の7割が関心を寄せていることが分かる。

高校入学後の自分自身について



「キ. 入学後、自身の競技力は向上した」、「ヨ. 現在在籍している高校へ入学して良かった」については、ほとんどの生徒が「1. 非常にそう思う・2. そう思う」を回答しており、現在の高校生活への満足度の高さがうかがえる。生徒への質問項目【⑧あなたが現在の部活動に入部して良かったことや嬉しかったこと】には「良い先輩や仲間、先生やコーチに出会えた」を始め、多くの回答が寄せられた。しかし、「ヨ」については部活動が直接関係しているとは言えないが、入学して良かったとは言い切れない状況にある生徒がいることが分かり、我々はこれらの生徒の存在があることを見過ごしてはならないと考える。

自記述回答(生徒) ※回答は自由

【今、部活動で困っていることや悩んでいること】

人間関係／部内での活動に対する温度差／先輩がいなくなつてからうまく自分たちがまとめていけるか／自信がない／練習場が遠い／部員が足りない／家計の負担が多い／怪我／うまくになりたい／伸び悩み／勉強との両立／指導者がいない／

【入部して良かったこと、嬉しかったこと】

大会成績／良い仲間・指導者に出会えたこと／精神的に強くなつた／礼儀やマナーを学べた／体力・技術の向上／楽しい／人間としての成長／充実している／進路に役立つ／生涯続けられるスポーツを見つけること

ができた／先生にほめられたこと／いろんなところへ行けたこと

記述回答（教員） ※回答は自由

【部活動指導と家庭の両立はできているか】できている 21 できていない 31

できているつもり／部活：家庭 = 9 : 1, 独身なので大丈夫だがこれでは結婚できない／家でいる時間がほとんどなく、部活のためにお金を持ち出すことが多いので家庭への負担が大きい／家庭は崩壊中／両立はありえない

【部活動の悩みを相談できる人はいるか】いる 35 いない 17

【気晴らしの方法】ある 41 ない 17 考えたことがない 1

部活動／読書／釣り／生徒と話すこと／スポーツ／家族との団らん／音楽鑑賞／生徒と汗をかくこと／旅行／睡眠／飲みに行く／パチンコ／

【部活動を指導している中で、嬉しかったこと】

生徒の成長／全国レベルの指導者との出会い／毎日ある／試合結果／卒業式の時に「3年間お世話になりました」と言われること／卒業生の訪問／競技をして良かったと思ってくれること／特にない／努力した生徒が好成績を残したこと／生徒が充実した顔をしているとき／卒業後も競技を続けてくれること／

4. まとめ

我々は毎日のように生徒たちと練習に励む。多くは生徒の競技力向上のため、さらにはその先にある生徒の人間性の向上のためである。しかしながら毎日指導しているからこそ生まれる疑問がある。「生徒たちは一体何を考えているのか」である。理解することが直接、競技力の向上につながるかと言えば決してそうではないかもしれないが、生徒との意識の差を理解することで、より良い指導のヒントが得られると考える。

結果から推測すると、生徒は競技力向上のために「自身の意欲」等自己に起因していることについてはそこまで積極的に目を向けておらず、顧問や外部コーチ等の指導力に頼っている面がある。競技の専門的な技術習得への関心が強く、進路や生き方に関することについての指導を積極的に受け入れる余裕があるとは言い難い状況である。16～18歳という年齢を考えると、視野の狭さは当然のことで、それを理解した上で根気強く指導していくことが大切である。しかし、結果として顧問が教えたいことが生徒に浸透している様子は記述回答から読み取ることができた。質問項目⑧によると、「良い仲間・指導者に出会えたこと」「礼儀やマナーを学べたこと」「精神的に強くなったこと」などの回答が多く見られる。

今回の調査では県内の総体上位校を中心とした運動部活動顧問の教員と生徒に意識調査を行うことで、両者の競技力向上に対する考え方の傾向を捉えることができた。県内で全国レベルの結果を残している教員や生徒が活動に取り組んでいる様子を学んだり、上位を目指そうとしている生徒のつまずきに気づくことは、生徒の競技力を向上させるための一助になるとされている。平成23年8月に行われた本県で行われた研究大会では、これらの調査結果に关心を寄せる教員も多かったため、調査結果を県内の高等学校へ配布することも視野に入れている。また、教員と生徒との意識の差を調査していく中で、教員が抱える悩みの現状についても知ることとなった。金銭的なストレスや家庭との両立の困難さなど、個人の意識や努力だけでは解決できない問題もあることを考えると、部活動に関係する人々がこの現状を理解し、負担が一極集中することのないように配慮する必要がある。競技力の向上を目指す中で、生徒に関わる人々が互いを理解し、協働していく過程は、単なる個人やチームの競技力向上に繋がるだけでなく、信頼性の高いコミュニティ形成にも繋がると考える。競技力向上を目指した部活動をそれだけに終わらせるのではなく、部活動に関わる人々が、「明るく豊かで活力ある生活」を営むきっかけを得られるよう、我々はそんなやりがいや楽しみを持ちながら、指導者として活動しても良いのかもしれない。